

街づくり、本づくり、モノづくりに共通するのは スペシャリストが活躍できる 「場所」をしっかりと用意することです

当社の人財教育を一般向けにまとめた『人生の「ねじ」を巻く77の教え』の実売印税をもとに児童書を購入し綾部市図書館に寄贈しています。7月16日(日)図書館での贈呈式にご出席いただいた奥村傳ポプラ社会長と、山崎善也綾部市長に、「つなげる」をテーマに当社代表取締役社長材木正己と鼎談をお願いしました。

行政は人と人をつなげるもの、本は時間や空間をつなげるもの、そしてねじは、モノとモノをつなげるものです。いずれもどの時代にもどんなところにも欠かせないものです。つなげる、つながる大切さ、そしてそのための人づくりの大切さについて紹介していきます。



左から奥村傳会長、山崎善也市長そして当社社長材木正己

「つなげる」をキーワードに 人づくり、街づくり、モノづくり

材木正己社長(以下 材木) 奥村会長には遠いところ、また山崎市長にはご公務のなか時間をご調整いただきありがとうございます。図書館での贈呈式の後の懇親会を利用して「次世代につなげる」ということでお話をすすめていただければと思います。よろしくお祈りします。早速ですが、まず奥村さんにお話をうかがいます。今日は、ポプラ社という老舗出版社の会長というお立場だけでなく、絵本文化推進協会の副理事長としても綾部にお越しいただきました。この絵本文化推進協会は発足したばかりだそうですね。

奥村傳ポプラ社会長(以下 奥村) そうです。先月6月22日に出版記念クラブで会の発足を記者発表したばかりです。この会のことを簡単に説明すると、文科省の外郭団体の「国立青少年教育振興機構」が絵本専門士という資格を認定しています。年齢やタイミングに合わせてどんな本を選べばいいのか、あるいは子供がより興味をもってくれる読み聞かせはどんなものか、絵本のプロを育てて認定

するということです。絵本のスペシャリストがたくさん生まれ裾野が広がれば情操教育、文化継承などにつながります。ただスペシャリストを育てても、その受け皿がなければ宝の持ち腐れですね。絵本文化推進協会はいわば絵本専門士のプラットフォーム。今日の綾部市図書館のイベントもそうですが、絵本専門士が活躍できる場をマッチメイキングする団体ととらえてもらえればいいですね。8月3日に東京の神保町のブックカフェで大きなイベントを企画していますが、今日の綾部市図書館での「絵本の読み聞かせライブ」については関西地区最初といいますか、当会のプレイベントということで、記者発表でも説明。綾部のことをPR告知させていただきました。

スペシャリストが活躍できる 場所をマッチメイキング

材木 綾部が最初ですか? ファーストとかいえばんってやっぱりうれしいですね。昔、「いちばんじゃなきやだめですか?」というフレーズが話題になりましたが、やっぱりいちばんじゃなきやだ



綾部市図書館に当社から106冊、絵本文化推進協会から25冊を寄贈。贈呈式後は絵本専門士による読み聞かせライブも実施しました

めなのです。日本一高い山はと聞かれて誰もが富士山と答えられます。それじゃあ2番は？と聞いて北岳だと正しく答える人はどれだけいますか？誤解されるといけませんので申し添えますが2番以下が悪いわけではありません。でも、最初、あるいは、ナンバー1を目指さないといけません。

当社は極小ねじ、精密ねじでは日本一です。「田舎の工場だけど、日本一に貢献しているんだよ、そしてこの会社でいちばんを取れば、じつは君が日本一になったことになるんだよ」と社員には発破をかけています。それから地盤調査機「ジオカルテ」は圧倒的シェアを誇り、小型調査機では世界ナンバー1だから、宇宙開発機構JAXAからも協力依頼がかかる…自社製品がいつか月面探索に貢献するかもしれないと夢が膨らむわけです。いきなり自社の自慢話みたいになってしまいました(笑)、いちばんということでは綾部もじつは自慢できるものがたくさんありますね。山崎市長、フォローしていただけますか？

山崎善也市長 (以下 山崎) そうなんです。まあ、どんどこにも「おらが街の自慢」というのはあると思いますが、綾部は人口3万5000弱の小さな街にも関わらず、いちばんが多いのです。世界連邦を宣言したはじめての市で、それが「中東和平プロジェクト」につながっていますし、限界集落に光を当てた「水源の里条例」も綾部市のモデルが全国に広がっています。大本(教)発祥おおもとの地で合気道が生まれたのも綾部ですし、「あやべのイチバ

ン」という冊子ができるほど誇れるものが多いですね。

奥村 『人生の「ねじ」を巻く77の教え』と同じ編集者が企画した『京都・あやべスタイル』が大変売れていると聞いています。人口3万5000弱のところで、1万数千冊。綾部の世帯数以上の本が売れた、多くの市民の方が買った、あるいは読んだことになるわけです。自分たちの街への誇り・愛着は相当なものなのでしょう。目に見えないけれどそれが街の力にもなっているのでしょうか。

なにができるか、 なにをしてもらえるかでなく いっしょになにができるかを掘り下げる

山崎 奥村さんの絵本専門士のお話のなかでスペシャリストを育てても受け皿がないと活躍できない。受け皿をつくる大切さを説かれました。それに関連して、綾部では今年の4月から「コミュニティナース活動」を行う3名の看護師を地域おこし協力隊員として迎えているんです。

看護師のなかには、自分のもつ資格や経験をいかして、日頃から地域の住民のそばで活動し、健康づくり地域づくりの支援ができればと考える人がいます。でも、そういう働き方をしたいと思っ
ていても実際には受け皿はないのが現実です。そこで、綾部市が受け皿というか、活動いただけるフィールドとして、全国に先がけてやってみようということではじめたものです。



会談は由良川を眼下に眺められる「ゆらり」で行なわれた

奥村 田舎の病院や診療所に勤めるというのとは違うわけですね。

山崎 病院や施設で働く看護師は、病気の方や具合が悪くなった方と接することがほとんどです。治療が主ですね。しかし、コミュニティナースは、住民の皆さんが健康なときから地域で会うことで日々の暮らしを充実させることが主となります。医療知識をいかして、住民の目線で地域の支え合いや健康づくりを目指すという新しい医療人材ということです。3名は、東京や秋田、滋賀県から綾部市に住民票を移して市内の農村部で共同生活を送っています。いまは地域の高齢者サロンや集会、行事などに参加したり、市の保健師と同行訪問したりしながら、絆や関係性を深めている段階です。地域の住民とのパートナーシップを形成できれば、地域の課題やニーズもおのずと把握できると思います。そうした地道な活動が地域づくりや健康づくりにいかされると思っています。

材木 奥村さんの出版ももちろんそうだと思いますが、メーカーにとって、自分がいいと思うものをつくっても、それをお客さんが気に入って買ってくれなければ意味がありません。お客様ニーズに応えられてこそ商品ですね。この「このコミュニティナース」の試みは、需要と供給のバランスというか、まさに、互いのニーズを掘り起こし整理するという意味で画期的なことですね。

奥村 それに、地域コミュニティというと、一般によそものが入りにくい雰囲気があります。よくいえば、ツーといえばカーといえる関係ですが、悪くいえば閉鎖的・排他的な側面もあります。企業でいえば組織の硬直化といえるでしょう。異文化、新しい血を入れるというのもおもしろい発想ですね。それで実際、順調に進んでいるのでしょうか？

山崎 今年の4月にスタートした取り組みですので、まだまだ手さぐりですし、確立された職業ではありません。ある意味で自由であり、まさしく「あやべスタイル」をつくり上げていく段階です。

3名のコミュニティナースが「与える側」になる



地域の寄り合いで健康体操を指導するコミュニティナースの3人

だけでは成功しません。行政や地域も3名を支え、協働していかなければ成功しないと思っています。いまは「何をすればいいのか」、「何をしてもらえるのか」という状況だと思いますが、これが「こうすればいい」、「こういうことを一緒にしたい」という思いをストレートにぶつけられる関係になればいいなと思っています。

やさしさ(幼稚)・シンプル(単純)を「わかりやすさ」と、はき違えないように注意

材木 今日のテーマは「次世代につなげる」です。少し抽象的ですが、奥村さんはこのためにいちばん大事なことは何だと思われますか？

奥村 本に携わっているからということではないですが「言葉」だと思います。そして、わかりやすく伝えるということですね。この「わかりやすい」というのは、「やさしい」とは違います。漢字をひらがなにするとか、幼稚な表現がわかりやすいと勘違いされがちですが、そうではないんです。たとえば小さな子供の作文で「ぼくは～～だと思った」「～～がうれしかった」「よかった」という感想文がありますね。親御さんにとっては自分の子供は天才ですから、それだけでうれしい。でも利害関係のない人から見れば、ほのぼのとした気持ちになれるかもしれないけれど、そこから情報も広がらなければイメージも膨らまないわけです。「綾部の安国寺に行きました。みんなといっしょ

にお弁当を食べて楽しかったです」では、感動を共有できません。安国寺がどんな寺なのか、歴史は、建造物としての価値は、風景は、まわりにおいしいお店はあるのか、その日の天気はどうだったのかなど、いくつもの情報を積み重ねていくことで、人はイメージを膨らませることができて、感動を共有できるのだと思います。そのいくつもの情報を精査し、そのうえでできるだけポイントを絞って伝わるものにするという作業が「わかりやすい」に、そして「そこへ行きたい」「それを守りたい」につながります。

山崎 標識を大きくすればいいとか、英語表記を入れたほうがより便利だとか、一見わかりやすいことでも、ではそれをすれば解決できるのかというと、そうでないことは多いですね。文字を大きくすれば読んでもらえる、明るくすれば見やすくなる、それでおしまいではなく、あくまで出発点だと改めて思います。

材木 当社の『人生の「ねじ」を巻く77の教え』の47番にゼムクリップから学ぶというのがあります。誰もがこのゼムクリップのことを知っています。誰もが知っているから、いわゆる説明書というものがついていません。こうすれば使えるって誰もが知っているんです。言葉で説明しなくてもいいという「わかりやすさ」の究極ですね。このゼムクリップが生まれたのは約150年前だそうですが、その間、何百という特許が申請されています。それだけ改良、進歩し続けているということですね。手前味噌ですが「ねじ」もそうです。いえ、ゼムクリップ以上の歴史があります。ねじを見てこれ何？と聞いたら小さい子でも「ねじ」っていつてくれますが、じつはやっぱり、日々、新しく変化しているのです。わかりやすいというのは、じつは日々の研究・研鑽の積み重ねの上にあるといっていいでしょう。

山崎 シンプルなのがいい。シンプル＝わかりやすいという勘違いもありますね。

材木 そうそう。たとえば崖があり、転落事故が

ありました。その後の対策としては、落ちないように柵を設けるというのがシンプルでいちばんわかりやすい方法でしょう。でも、柵をもうけることで景観が台無しにならないか、周りの生態系を壊さないか、もしかしたらかなり無謀な行為のうえでの転落事故だったのに、柵をもうけることで周囲の人たちの思いにまで柵をもうけていないか……山崎市長のお立場ではなかなかストレートにいけないことも多いでしょうが、今はなにか耳に心地いい言葉とか流行りに流される傾向がありますね。安全安心といえただけで免罪符になってしまう。でも奥村さんが先ほどおっしゃったことを、この安全に置き換えると、なんのための安全か、誰のための安全か、いろいろなところから安全を検証し積み重ねることで、安全安心を多くの方とはじめて共有できるわけですね。

変化を受け入れること それが次へつながる

奥村 今日は日曜日でしたのであにく工場の稼働しているところを見学できなかったのですが、応接でねじをつくるヘッダーとローリングでしたでしょうか、ねじ事業創業時の機械に触れることができました。日本のモノづくりってやっぱりすごいですね。歴史の重みを感じました。

材木 まだまだこういった資料が眠っているんです。これを整理し、いずれはミニ博物館ができればいいなと思っています。でも当社以上に歴史が



日東精工本社にある創業当時のヘッダーを奥村会長にご説明

あるのがグンゼさんで、今日のご案内できませんでしたが、グンゼスクエアには博物苑があって、歴史的な機械や資料が展示されています。広場にはバラ園も整備されていて市民の憩いの場になっているのですよ。

山崎 グンゼは「表からみれば工場、裏からみれば女学校」と呼ばれたぐらいに人財教育に力を入れられた。また貧しい養蚕農家にも株主になってもらったり、量より質を優先する「上糸主義」をすすめたりするなど、今でいうCSRやフェアトレードを、その言葉の概念がなかった100年前に実践していた会社です。そしてそれがやはり同じ綾部の上場企業、日東精工さんにも受け継がれています。

そして日東精工さんを中心に綾部工業研修所が生まれ、50年以上、地元技術者の底上げに尽力いただいています。また、先月、6月初旬には材木社長とご一緒にタイに出張したのですが、これは綾部工業団地と京都工芸繊維大学、そしてタイのキングモンクット工科大学とのグローバルな産学連携を進めていくもの……。こういった要所、要所で、綾部の地元企業の力を借りられるのは、とてもありがたいことだと思っています。

奥村 それでこういったモノづくりの現場に触れて常々思うのは「そこにとどまっていない」ということですね。守る、残す、つなげるというと「なにがなんでもそのまましっかり残す」という先入観があるけれど、老舗と呼ばれているところは常に時代を見すえて、変化しつづけている。ときには目を瞠るほどに大きなドラスチックな変化もありますが、ほとんどは小さな変化の、やはり、こちらも積み重ねですね。

材木 当社の「タップタイト」というねじは、雌ねじ（ナット）を必要としないねじで、40年以上のロングセラーです。でもやはりお客様の要望に応じて、日々、新しいものに生まれ変わっています。奥村さんのところの『かいけつゾロリ』、うちの孫も愛読していますが、30年、延べ60冊を超える人気シリーズですが、しっかりとしたキャラクター



ポブラ社の人気者『かいけつゾロリ』は3年前に当社を表敬訪問。ねじを学んで行きました!?

が立っているうえで、やはり、その時代の流行りのものをうまく取り入れている、やはり変化をとらえることで、つながっているのでしょうか。

また、お役所でいえば「前例がない」とか「上級官庁の指示どおりに」というイメージを抱きがちですが、山崎市長は日本政策投資銀行の国際部長という民間のトップエリートだった方ですから、先ほどの「コミュニティナース」もそうですが、新しいこと、変化を厭わないところが素晴らしい……

山崎 ありがとうございます。もちろん、私というよりも、まわりががんばってくれますし、前任者が礎を築いてくださったからでしょう。たとえば先ほど申し上げた「水源の里条例」も10年続いています。過疎高齢化は簡単に解決できるものではありません。でもこの取り組みで、暮らす人の心に変化が表れた。「なんもない、未来もない」と下を向いていた人たちが「自分たちの街も捨てたもんじゃない。誇れるものがある」と前向きに元気になりました。下を向いている限りはなににも変わらない。でも気持ちが前向きになれることで、希望もてる、未来を信じられる。古屋の集落は92歳と、89歳、87歳の3人のおばあちゃんと60代の息子さんの併せて4人の京都府でいちばん小さな集落ですが、年間数千人ものボランティアが訪れ、おばあちゃんたちも励みになるし、また若い人たちもおばあちゃんから逆に元気をもらって帰っていくなどの、プラスの循環が生まれています。

あやべ、ポプラ、そして日東精工連携で「本づくりで街づくり」という試み

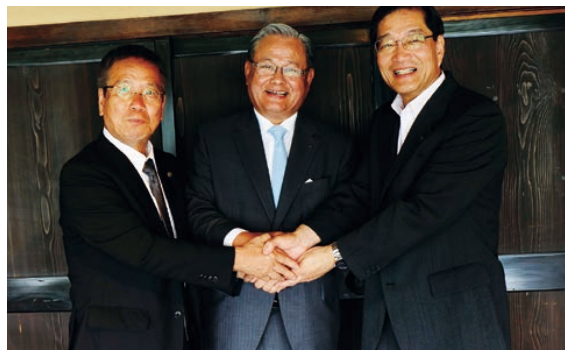
山崎 綾部の方もあまりご存じないのですが、図書館で読者手帳を発行しています。このアイデアもじつは綾部発で全国に広がったものだそうです。昨年4月には『サクラティエ』という「絵本カフェ」もオープン。綾部福祉会が運営主体で、障がい者の方がスイーツをつくったり、サービスに従事したりしているのですが、児童公園が隣接していて、ゆったりできる癒しの空間になっています。「本をキーワードにした街づくり」と綾部在住の半農半Xの塩見直紀さんが提唱されていましたが、いろいろなユニークな取り組みが進行中です。昨年秋の『驚きの地方創生「京都・あやべスタイル」』もそうですが、日東精工さんを通して、いろいろな出版社とつながりができるのはありがたいです。

奥村 そして現在進行中なのが『あやべ大好きBOOK』。当社 ポプラから9月末に発行予定です。アンケートに答えて本づくりに参加しませんかと、新聞やラジオ、チラシなどで呼びかけ、市民参加でつくる本。まさに「本づくりを通して街づくり」という新しい試みです。この企画が生まれるきっかけも日東精工さんでしたね。

材木 当社では毎月ニュースレターを発行してい

ます。紙だけで2000、メールマガジンを加えると4万人以上にお届けしているのですが、せっかくだから綾部の街のことも紹介していこうということで、街紹介を連載しています。来年の当社創業80年の記念に、この連載をまとめるという考えもあったのですが、内向けのこじんまりとしたものをつくっても仕方ありません。ポプラ社さんや綾部の皆さんのご協力で、日東精工という枠を超えた広がりのある素敵な企画になりました。この企画も「あやべ発」「あやべスタイル」です。

人が元気である、前向きである。それが街づくり、モノづくりの基本ですね。綾部市さんともポプラ社さんとも、これからも新しいこと、おもしろいことを創出していきたいですね。どうぞよろしくお願いします。今日はありがとうございました。



奥村会長、材木社長、山崎市長3人ががっしり握手。どんどん新しいこと、人がわくわくすることを創出していきます

「あやべ大好きBOOK」プロジェクト始動

鼎談のなかでも紹介しているように、このニュースレターで連載中の「ねじの街・あやべの魅力」をベースにした綾部ガイドブックをポプラ社から発刊します。できるだけたくさんの市民の方の声を集めて構成していきます。協力者のお名前を同書に掲出するという、よそではまだ行われていない画期的な企画です。綾部在住者、綾部出身者でなくても、綾部が好きの方はどなたでも応募できるので、本づくりにぜひご参加ください。

より詳しいことや応募は↓から

<http://blog.j-cast.jp/wspring/>

日東精工の
マスコットキャラクター
「ねじとくん」が
ナビゲーターを
務めます



ねじ業界のPRに協力しました

2017年7月12日から15日まで、東京ビッグサイトで開催された「MF-Tokyo2017 プレス・板金・フォーミング展」に、日本ねじ工業協会が協賛団体として出展しました。

「この世はねじで出来ている！—いつだって、どこだって解決する‘ねじ’—」というテーマで、さまざまな分野で活躍するねじの世界を紹介したもので「ねじ締め付け体験教室」や「ねじブロック」を使った創作ワークショップなども開催。

当社日東精工もブースへの製品提供をしたり、スタッフを派遣したりし、ねじ業界のPRに協力しました。



ねじとくん、海外でも活躍

当社日東精工のマスコットキャラクター「ねじとくん」。LINEスタンプになったり、合格祈願ねじの案内役になったりと大活躍していますが、写真のようにインドネシアでは輸送用トラックに大きく露出しています。また現地法人の社員旅行では社員だけでなく家族もお揃いでねじとくんTシャツを着用、楽しい休日をお過ごししました。



もともと、ねじとくんはインドネシアからの研修生がデザインしたもので、インドネシアでとくに愛されているのですが、これからは日本国内も含め、もっともっとグローバルに活躍していく予定です。

次代に「つなげる活動」を応援!

巻頭特集でも紹介しているように『人生の「ねじ」を巻く77の教え』の実売印税をもとに、当社では児童書を購入し綾部市の図書館へ寄贈。7月16日、3回目となる今回は、寄贈式だけでなく「絵本の読み聞かせライブ」も開催。大手書店チェーンふたば書房の社長・洞本昌哉さんにも絵本専門士としてご協力いただきました。「絵本文化推進協会」（作家柳田邦男さんが会長6月22日発足したばかり）のキックオフイベントでもあり、今後も当社では「次代につなげる」活動をサポートしてまいります。



海外インターンシップを積極支援

タイのキングモンクット大学トングリ校 (KMUTT) と京都工芸繊維大学、そして



綾部工業団地振興センターとの間で締結された海外インターンシップ協定を、綾部工業団地に拠点をおく企業として、当社は全面支援しています。

6月13日にKMUTTから16名の学生が来社。工場を見学し技術力だけでなく、安全を経営の基盤とする管理体制などを学んでいただきました。当社は産学連携と海外展開に注力しており、「絆経営」を背景に海外の学生を現地法人に受け入れる体制づくりも視野に入れています。

※当社代表取締役社長 材木正己が2週連続でTV出演しました。
7月29日(土)・8月5日(土) 21:55~22:00

<http://www.nittoseiko.co.jp/ir/interview.html>



最後はヒューマンエラーと心得よう
〜路線バスのミラーにみる安全意识〜

路線バスについている鏡（ミラー）の数がいくつあるかご存じ？

車両の外にあるのが、①右窓から後ろを見るミラー②フロントウィンドウ左から後ろを見るミラー③フロントウィンドウ左から

左斜め後ろを見るミラー④フロントウィンドウ左手から左前バンパー付近の死角を見るミラー⑤フロントウィンドウ右手から右前バンパー付近の死角を見るミラーです。

そして車内には⑥フロントウィンドウ中央から車内を見るミラー⑦右窓枠についている車体右壁際から車内の後方を見るミラー⑧左前出口の真上についていて運転席から出口ステップを見るミラー⑨

左前出口の運賃表横についている車内左壁際に後方を見るミラー⑩左中央又は左後方の入口ドアの、真上付近についているミラーなど。

これは近距離を走る大型バスの標準のようで、車種や路線などでもちろん数は違ってくるので

ですが、以前テレビで海外のバス会社の方が日本を視察して、その多さに驚き安全への徹底ぶりに感心している姿が紹介されていました。

日本はすごいねと褒められると悪い気はしません、その一方で、つい先日、足の不自由な方が乗って来られて席に着こうとしたときにバスが発進、次の信号で止まるまでよるけなないように座席を支えるようにして立っておられる光景を目にしました。

ミラーをしつかり見て確認していれば着席するまで待つことができましたのに、ずいぶん荒っぽい運転手さんでした。安全のためにいろいろなシステムをつくり、日々改良工夫を加えていくのは大切。しかし、その一方で、どんなシステムをつくっても最後は人である、と自戒することを忘れないようにしたいですね。



このコラムは当社日東精工の人財教育に約40年携わっていただいた経営コンサルタント蒲田春樹氏が監修した言葉や教えを経営企画室で再編集して紹介するものです。なお、当法人財教育を一般向けにまとめた「人生の「ねじ」を巻く77の教え」(ポプラ社)も版を重ね、国内だけでなく海外版も発行されています



全国に先がけた「ハイパー消防団」

ねじのある街・あやべの魅力

「消防団」は、本業をもちながら、「自分たちの街は自分たちで守る」という精神に基づいて、地域の安全と安心を守るために活躍している人たちが集まる消防機関です。もちろん全国市町村にあるのですが、綾部では10年前に「ハイパー消防団」を結成。大型特殊車両やフォークリフトの運転電気工事士、アマチュア無線、応急手当普及員などといった専門的な技術や資格を持つ団員がハイパー消防団員として登録。土砂崩れや河川の増水などの災害現場において特殊な機材等が必要とされた場合、状況に応じて登録している団員に召集をかけるという、全国的にも珍しい、綾部先がけの制度です。

また団員が割引などの特典が得られる消防団応援の店が制度化されていますが、市全体として取り組みをはじめたのは京都府では綾部が最初です。皆で街の安全をしっかりと守っています。



ねじ大好き！
コラム

ダ・ヴィンチのねじのスケッチ

東京丸の内の三菱一号館美術館で9月24日まで「レオナルドVSミケランジェロ展」が開催されています。ここでいうレオナルドとはダ・ヴィンチのこと。

レオナルド・ダ・ヴィンチは「最後の晚餐」や「モナリザ」などで有名ですが、生きていた当時は画家だけでなく、技師としても活躍し、タップ・ダイスによるねじ加工原理のスケッチやねじ切り施盤のスケッチをノートに残しています。これらのスケッチは残念ながら今回出展されていないようですが、今から500年も前に「ねじ」の大切さに気づいていたのです。

